

## 井上靖『壺』に投影された老舎の精神的探求と政治的苦境

羅, 伝勲  
九州大学地球社会統合科学府 : 修士課程

<https://hdl.handle.net/2324/7318874>

---

出版情報 : 九大日文. 44, pp.35-45, 2024-10-01. Association of Japanese Literature, Kyushu University  
バージョン :  
権利関係 :

# 井上靖『壺』に投影された老舎の精神的探求と政治的苦境

羅 伝 勲

## 一、はじめに

日中関係が冷え込んでいた1950年代において、毛沢東(1893~1976)と周恩来(1898~1976)は「民間先行、以民促官」<sup>(1)</sup> (民間が先に交流を進め、民を以って官を促す)の対日民間外交方針を提唱し、積極的に推進した。中国では、1954年に政府の指導の下、民間外交活動を行う人民団体である「中国人民対外文化協会」が設立された。日本でも1955年に「日本中国文化交流協会」が創立され、日中両国の文学交流はますます頻繁になり始めた。

1965年、近代中国の作家である老舎(1899~1966)が団長を務める中国作家代表団が、日本で1か月と4日間の訪問を行った。来日中、老舎は東京、大阪、奈良、京都、箱根、鎌倉、仙台、日光などの名所を見学し、中島健蔵(1903~1979)、亀井勝一郎、阿部知二(1903~1973)、志賀直哉(1883~1971)、谷崎潤一郎(1886~1965)、大岡昇平(1909~1988)、丹羽文雄(1904~2005)、水上勉(1919~2004)、井上靖(1907~1991)など30人近い日本の著名な作家、評論家の私邸を訪ね、アジア・アフリカ作家会議日本協

議会、京都大学中国文学会の活動に参加し、日本の脚本作家、京都の文学愛好家などと交流した。

日本側では「歓迎会や懇親会などが大小さまざまなかたちで頻繁に行われ、井上靖も出席すること」<sup>(2)</sup>が多く、老舎と最も頻繁に接触した作家の一人であった。訪日翌年の1960年に、老舎は文化大革命の中で迫害を受けて自殺した後、国際的に最初に立ち上がり老舎のために不平を訴えた作家は、正に井上靖などの日本の作家であった。1970年、井上靖は広津和郎(1901~1968)と老舎の逝去を記念して追悼の回想文『壺』を書き、一つの文章でこれらの日中両国の作家を同時に追悼した。文章のタイトルは、老舎が帰国する一週間ほど前に老舎歓迎会の午餐会で語った壺に関する物語から取られている。

老舎が語った物語の内容は以下のとおりである。昔、ある金持ちが多くのお骨董を収集していたが、仕事に失敗し、とうとう物乞いに零落してしまった。物乞いはすべての骨董を手放したが、ただ一個の壺だけはどうしても手放さなかった。その壺が別の金持ちの手に落ちないようにするため、病死する前に、最後の力を振り絞って壺を微塵に砕いていた。当時、その話を宴席の余興として聞いていた日本の作家たちは、老舎当時の政治的な苦境とこの物語の内在的なつながりに気づかなかつたが、文化大革命の中で老舎が自殺した後、日本の作家たちはこの物語を改めて再考するようになった。

藤澤全(2005)は、老舎の死後の中国政治局勢を詳しく論証し、「壺」が換喩によって老舎の生命を具象化したものであるという視点を提示した<sup>(3)</sup>。藤澤の研究は「壺」の象徴性につい

て深く考察する視点を提供しており、老舎が直面した政治的な苦境を理解する上で参考になる。また、「壺」の物語の典故については、はつきりしていないと表明し<sup>(4)</sup>、それを契機として、物語の典故の考察を試みた。渡辺武秀<sup>(5)(6)</sup>は、老舎が語った「壺」の物語を、「不伝の世界」と関連付けて解釈し、その上で『断魂槍』のストーリーの展開を参考にした。「壺を砕く」行為はまさに「不伝」を象徴し、その中に深い悲しみや絶望的な悲惨さが潜んでいると述べている<sup>(6)</sup>。渡辺の研究は、老舎の「壺」の物語に潜む深層的な悲しみや悲惨さを探求するための契機を提供しており、老舎の訪日中に直面した政治的な苦境との関連性を掘り下げる際の重要な視点となっている。

先行研究によれば、当時老舎が「壺」の物語を語っていた際の政治的な苦境や中国伝統文化における壺の意象などはまだ十分に考察されておらず、物語の典故も明らかになっていない。したがって、本稿では老舎が語った「壺」の物語の典故を分析し、中国の伝統文化における壺の象徴的な意義を考察する。また、老舎のエッセイに反映された老舎の理想的な詩人像と、当時直面していた政治的な苦境を通じて、老舎の精神的な探求と政治的な苦境を明らかにしたい。

## 二、井上靖『壺』における老舎の「壺」の物語と喩血輪『茶乞』の比較分析

文芸家協会が主催された歓迎会で、老舎はかつてない疲労感

が現れており、「この時が一番老いて」<sup>(6)</sup> 見えた。しかし、団長としての老舎は、「愛想もよく、如才もない感じ」<sup>(7)</sup> で、日本側に「不快の感情を持たせまいと勤めている」<sup>(8)</sup> ように見えた。

老舎が食後の談笑の際に、日本の作家たちに中国の「壺」に関する物語を語り始めた。

むかし中国に沢山の骨董の名器を持っている金持ちがあった。仕事に失敗し、次々に名器を手放して行ったが、その果てにとうとう物乞いにまで零落してしまった。しかし物乞いになっても一個の壺だけは手放さず、その壺を持って放浪した。それを知った別の金持ちが何とかしてその壺を手に入れたく想い、高い値段で買取ろうとして何回も交渉したが、物乞いは決してそれに応じなかった。ところが何年か経って、物乞いは老いて歩行さえも難しくなった。金持はそうした物乞いに家を与え、食を給し、ひそかに相手が死ぬのを待った。やがて物乞いは老いの果てに病んで死んだ。金持は待ちに待った時が来たと思つて悦んだが、なんと相手は息を引き取る前に、その壺を庭に擲つて微塵に砕いていた。<sup>(9)</sup>

井上靖の『壺』によると、以上が老舎の語った「壺」の物語の全てである。この話に対して、当時の井上靖は「深い意味を持った話ではなく、その場限りの笑話として受けとっているものであった」<sup>(10)</sup> という感想を持った。しかし、前文芸家協会の

会長であった広津和郎はすぐに異なる見解を示した。

わたしの国では、いい壺や皿だったら、決して割るようなことはしない。あすは城が落ち、自分も死ななければならぬと知ったら、自分の持っている名品名器を、たとい敵であつても、相手方に渡してしますよ。実際にそういう武将がありました。<sup>(11)</sup>

広津和郎が自分の見解を述べ終えると、雰囲気は一時的に重くなり、老舎も「一瞬戸惑った表情」<sup>(12)</sup>をした。

それでは、この「壺」のエピソードは、果たして老舎が実際に語ったものなのか、それとも井上靖の創作なのか。この点について、当時歓迎会に出席した中国の作家劉白羽（1916～2005）の言葉から検証できる。「実は、老舎と広津はそれぞれ自分の道徳的な模範を語ったのである。老舎が話したのは、横梁に向かって死をも恐れず屈しないことであり、広津が話したのは、自分を顧みず国宝を大切にすることである」<sup>(13)</sup>と劉白羽が示した見方から、老舎は確かに歓迎会でこの物語を語っており、井上靖の『壺』も老舎の物語の影響を受けて創作した作品であることがわかる。

1977年、井上靖が訪中行程を終え帰国する前夜、自分の本『桃李記』を中国の作家である巴金（1904～2005）に贈り、その中には『壺』も含まれていた。巴金は『壺』を読み終えた後、井上靖にこのような物語を聞いたことがあるが、物語の終わりは違

うと言った<sup>(14)</sup>。巴金が聞いた「壺」の物語では、「壺」は福建人がお茶を入れるのに用いるような小さな急須であり、物乞いがこれを捨て壊しはしなかった。彼は金持ちの老翁と一緒にこの急須を使い、毎日これでお茶をいれ、ずっと死ぬまで使った<sup>(15)</sup>。実際には巴金と井上靖の対話が、「壺」の物語の出版を探るための重要な手がかりを提供している。巴金が聞いた物語は、喻血輪（1892～1967）の『綺情楼雜記』中の「茶乞」一文に詳細に記載されている。

昔、福建に非常にお茶を好む金持ちがいた。ある日、物乞いが彼の家に来てお茶を求めた。金持ちは笑いながら、「君もお茶のことが分かりますか」と聞いた。乞食は、「私も以前、金持ちでしたが、お茶のために破産しました。今は物乞いで生計を立てています」と答えた。金持ちは彼にお茶を注いであげ、物乞いは飲み終わった後、「お茶はとても良いが、急須が新しいから、芳醇さが足りません。私は古い急須を持っていて、貧乏でも手放しません」と言った。金持ちはその急須を見せてもらおうと、非常に気に入って、それでお茶を煮たら、やはり味が特別であることに気づき、購入したいと思った。物乞いは、「この急須は全部は売れませんが、半分だけ売ります。急須のお金で妻を安定させてから、私は時々あなたの家に来て、一緒にお茶を飲んでおしゃべりすることができます」と提案した。金持ちが同意すると、物乞いは頻りに金持ちの家を訪れ、二人は一緒に

にお茶を楽しみ、友達になった。<sup>(16)</sup>

以上が、巴金が聞いた物語「茶乞」の筋書きである。文章の筋書きは老舎が語った物語と基本的に一致しているが、「壺」の種類と物語の終わりが異なる。種類では、一つはお茶とは何の関係もない骨董の名品である「壺」であり、もう一つはお茶を飲むための「急須」である。物語の結末に言及すると、一つは死ぬ前に「壺」を微塵に砕いたというものであり、もう一つは金持ちと共有するというものである。それにより、老舎が語った「壺」の物語は、「茶乞」を基にした改作である可能性が非常に高いことがわかるであろう。

老舎が上記とは異なる結末にした意図について、巴金は老舎がユーモアに富んだ人であるから別の終わりを語ったにちがいないと考えていた<sup>(17)</sup>。しかし、この物語を単に老舎のユーモアに基づいて語った食後の笑い話として解釈するならば、笑いを引き起こす要素が欠けていることに気付くのは難しくなく、広津和郎の反応から見ても成功した笑い話ではないことが明らかである。そのため、「壺」の物語には明らかに老舎の特別な意図が隠されていると考えてよいであろう。

### 三、中国の伝統文化における「壺」の多重的な象徴とその意味

「壺」の物語に込められた老舎の意図を考察しようとき、壺が中国の伝統文化において持つ象徴的な意味を決して見逃すこ

とはできない。

壺は中国において歴史が長く、重要な生活器具であり、人々の生活と密接に関連している。飲食や娯楽などの生活分野、石刻や絵画などの芸術分野、詩や小説などの文学分野のいずれにも、壺の存在が見られる。特に文学の分野では、壺は古くから記録され、様々な文学作品に登場しており、先秦時代の作品において既に多くの壺に関する記述があり、その内容も非常に豊富である。秦以降、壺に関する文学作品はますます増え、詩の中では特に多く見られる。

古人の生活と密接に関連する器物として、壺は必然的に古代中国の詩人たちによつて詩に書かれ、感情と意図を伝える重要な象徴の一つとなった。中国の伝統文化において、壺はまず、忠貞、清廉、潔白などの象徴として非常に多く用いられている。

一千年以上前の南北朝時代には、詩人の鮑照が最初に「直如朱丝绳，清如玉壶冰」<sup>(18)</sup>（赤い絹糸のように真っ直ぐであり、玉壺に入った水のように澄んでいる）という詩句で、「壺」を「玉」と結びつけ、純潔なのに理由もなく猜疑、恨みを受ける不平の声を表現しており、自らの潔白を比喻した。鮑照から発端となった「壺」の高潔や清廉などの象徴は、唐代の詩人たちによつて広く受け継がれ、後世の詩歌創作に深遠な影響を与え、文学作品の中で常に用いられる象徴となった。

鮑照の詩の影響を深く受けた唐代の詩人である王昌齡は、誹謗のために左遷され、友人と別れる際に時、「洛阳亲友如相问，一片冰心在玉壶」<sup>(19)</sup>（もし洛陽の親友が私のことを尋ねたら、私の心は

今も玉壺の中の氷のように純粹であると伝えてください」という千古の名句を残した。王昌齡は鮑照の詩の比喩を踏襲しつつも、また「玉壺」を「心」と見事に結び付け、芸術的な構想で独自の特色を打ち出した。王昌齡の詩は心の純潔さと透明さを際立たせるだけでなく、視覚的な美しさも兼ね備え、人柄の清白さと高潔さをより一層引き立て、後世に大きな影響を与えた。

明末清初の詩人である顧炎武も、「知君心似玉壺清，未肯緇尘久雒京」<sup>(20)</sup>（私はあなたの心が玉壺の氷のように純潔であり、塵の中に長く留まりたくないことを知っている）という詩句で、友人の心が玉壺のように高潔であり、俗世の汚れを嫌う崇高な品格を讃えた。顧炎武のこの詩は、明らかに鮑照と王昌齡の二人の影響を受け創作されたものであろう。

現代においても、「冰心玉壺」という言葉は人の純潔で清らかな情操を比喻するために使われ続けており、壺の忠貞、清廉、潔白などの象徴的な意味は途切れることなく、現代に至るまで続いているのである。

以上述べた象徴の他に、壺は中国の伝統的な宗教である道教とも非常に密接な関係があり、道教文化の重要な媒介として、仙境の象徴としてしばしば用いられる。中国古代の文人は文学創作において道教の思想に深く影響され、壺を現実世界の苦難から逃避し、精神の自由と超脱を追求する媒介として、そこで壺は理想的な世界の象徴になった。

盛唐の時代の詩人である李白は道教の思想を融合し、「飲酒入玉壺，藏身以爲宝」<sup>(21)</sup>（酒を飲んで玉壺の中に入り、その中に身を隠

し宝のように大切にす）という詩句で、現実世界からの逃避と理想世界への追求を表現した。

宋代詩人である王炎の「已但壺中堪避世，也胜图上可游山」<sup>(22)</sup>（壺の中で世間を避けるだけでなく、絵の中の山をも楽しむことができる）は、壺の中の世界と現実世界を分け、理想的なユートピアを創造し、壺は彼が現実の險悪と苦悶から脱却するために設けた理想の天地となった。

詩人の李中の「莫把壺中秘訣，轻传尘里游人」<sup>(23)</sup>（壺の中の秘訣を、軽々しく浮世の人に伝えなideてください）は、仙境の神秘さを強調し、俗世間に干渉されたくなく、原始的な状態を保ちたいという願いを表現した。

現代でも、「壺中天地」という四字熟語で、静かで邪魔されない、のんびりとした生活を指すことがある。

老舍は幼少期より読書を好み、特に中国古典文学に強い興味を抱いていた。10歳前後で学校に入学したが、古書を多く読んでいたため、国語の成績が優れており、課外時間においても古文の学習を続けていた。老舍が中学時代に通っていた北京師範学校でも古文教育が重視されており、学生時代に中国伝統文化への深い関心を培い、堅固な文化的基盤を築くことができた。

後に齐鲁大学の教授として「文学概論」の講義を担当した際、老舍は『論語』『詩経』『楚辞』『易経』などの文献を多く引用していた。これにより、老舍が中国伝統文化に精通しており、幅広い知識を有していることが分かるであろう。「壺」は中国伝統文化において重要な象徴的意味を持つものであり、老舍の

豊かな文化的背景や以上述べた二つの象徴的な意味を踏まえた上で、改めて老舎の「壺」の物語に目を向けよう。

渡辺武秀 (2005) が物語の展開を再整理したところ、注目すべき点がいくつかあると指摘している。

その一つは、主人公が割った壺は、多くの骨董品の名器のうち、手放さずに残した最後の一個であるという点である。

だとすれば、この主人公こそが最もこの壺の価値を理解していたのだし、またこの「壺」に対して特別な深い愛着を保持していたことになるように思われる。もうひとつは、主人公はこの壺だけを自分が死んでしまう直前に、自らの手で割ってしまうという点である。(下線引用者、以下も同様)

中国の伝統文化の文脈から、上記の二点について以下のように説明することができる。第一に、物乞いが「壺」に執着したのは、実際には個人的な信念を守るためである。自分の精神上的の純潔を維持するために、彼は「壺」と共に滅びることにした。第二に、「壺」は他の骨董品とは異なり、残酷な現実とは対照的な理想の世界を意味しており、物乞いにとって最後の精神的な拠り所である。そのため、物乞いは「壺」に対して、壊れても金持ちに渡したくないという極めて強い感情の表現であったといえるであろう。

「壺」の物語を通じて、老舎は中国の伝統文化と道徳倫理に

対する深い理解を伝えているだけでなく、個人の精神と理想の堅守をも表現していることがわかる。老舎にとって、伝統文化は「知識論の意味での存在物ではなく、生活様式と行為実践であり、道徳倫理の自覚」<sup>(24)</sup>である。

#### 四、屈原から老舎へ…詩人にとつての「壺」

中国戦国時代、楚国の愛国詩人である屈原は、君主に仕えることを自分の生涯の使命としたが、佞臣たちの排斥と誹謗により、報国の夢が叶わない状況に追い込まれ、水に身を投じて殉国した。屈原は自殺を生命の価値を実現する究極の手段と見なし、詩編『離騷』の中で自殺を諷い、自殺を理想を追求し、現実に反抗する勇敢な精神の実践として位置づけた。そのため、多くの人にとって、同じように入水自殺した老舎は屈原であり、巴金、季羨林 (1911～2009)、葉聖陶 (1894～1988) など、老舎の死を屈原と結びつけて捉えている。屈原の深い愛国情熱と、政治闘争の中で理想を堅持し、真理を追求するために命を賭けた不屈の精神は、20世紀の中国において老舎の姿を通じて一層鮮明に表現された。

戦争中、伝統文化は国民を団結させる重要な手段となった。民族の自信を高めるため、中国は1941年の端午に愛国詩人屈原を記念する第1回詩人祭を開催した。老舎は詩人祭当日に「詩人」という文章を書き、その一か月後には『詩人節献詞』(詩人祭献辞)を執筆した。これらの作品には、屈原の死んでも屈原服

しない精神に対する肯定と追求が表れている。

詩人——おそらく体質が人々とは異なるため、天才が常人とは違うため、あるいは注目しているのが油・塩・みそ・酢のようなものではないため——いつも長所もあれば短所もある、極めて注意しているところもあれば、極めて注意していないところもある。詩人は四つの目を持っているため、一片の飛絮を老翁と見なし、一粒の砂の中で世界を見出すことができると言われている。(中略)他の人々が喜び、歌い踊っている時に、彼は人々に嫌われる警告を発する。人々が笑っている時には、彼は泣き崩れる。社会に本当に災いがあった時には、彼は身をもつて諫め、水に身を投げ、殉難するのである。普段の小さな行動が狂気と見なされるように、彼の自己犠牲による救世の大義もまた狂気と見なされるのである。たとえ身を捨てる機会がなくても、彼は五斗米に腰を折らず、権力者に媚びることもなく、貧困で死んでしまうだろう。彼には何も無い。ただいくつかの詩があるのみである。詩は彼の飢えと寒さを救うことはできないが、民族全体に永遠に消えることのない栄光をもたらすのである。<sup>(25)</sup>

詩人とは、単に詩の技法を知っている詩匠を指すのではない。詩人は文芸の上である程度表現しているが、その人間性も詩と調和しているべきである。詩は正義を表し、真理

を明らかにし、深い感情を表現するものであるため、詩人はまず正義感を持ち、真理のために犠牲を払う勇氣があり、深い感情をもってその文字を支えるべきである。(中略)抗戦の四年間、国全体が一つの崇高な理想の下で国難に立ち向かい、頭は斬られても信念は侮辱されてはならない。この理想は詩の本質であり、この苦難は詩の本領である。この本質があるからこそ、血で侮辱を洗い、弱者で強者に立ち向かうことを恐れず、この本領があるからこそ、世界を驚かせ、称賛を集めるのである。<sup>(26)</sup>

これにより、老舎の理想的な詩人は、まさに屈原のように真理と正義を追求し、権勢と物質の誘惑に屈服しない人であり、屈原は崇高な理想と強靱な精神を持っており、死亡を恐れず、真理と正義のために身を捧げる勇氣があつたと考えられる。

注目すべきは、老舎が訪日中に、政治的な原因で執筆の自由を大きく制限されていたにもかかわらず、34首の旧体詩を創作したことである。<sup>(27)</sup>もし訪日期間の老舎を詩人として捉え、「壺」の物語を語る意図を理解するならば、その物語の結末は、理想の詩人屈原の玉碎瓦全の精神を体現したものであると考えてよいであろう。したがって、「壺」の物語は単なる笑い話ではなく、老舎が崇拜する精神の反映であり、詩人はどんな状況でも自らの気骨を放棄せず、侮辱を受けたときには死を覚悟し、侮辱を自らの血で洗い清めるべきだということを示しているのである。

## 五、「壺」と共に消えゆく命…老舎の政治的苦境とその終焉

老舎の一生は、文学的な成果の輝きに包まれており、同時に政治の曇りによって悩まされていた。したがって、老舎が「壺」の物語を語る意図は、当時老舎が置かれていた政治環境の中で受けた屈辱とは切り離せない。

1958年3月に老舎の戯曲『茶館』が初演され、その頃は「反右派闘争」の終息と「大躍進」の真つ只中であり、政治環境は再び厳しくなっていた。7月10日には『茶館』の上演が中止され、新聞で『茶館』に対する批判も始まった<sup>(28)</sup>。批判の内容は、この戯曲が反動派の必然的な滅亡と人民革命の必然的な勝利という思想が全編にわたって貫かれていないとされ、極左の政治的な雰囲気もはやこの戯曲の存在を許さなかったというものであった。

1959年、老舎のかつての愛人であった趙清閣(1914～1999)が職を失ったため、手紙で老舎に助けを求めた。老舎が当時の大金800元を送り、そのことが妻に発覚し、夫婦の間に大きな軋轢が起こった。妻が怒って老舎の品行問題を告発し、老舎は更に批判されるようになった<sup>(29)</sup>。

1960年には、「反右派闘争」を乗り越えた老舎が、批判の対象となる危機に直面した。この年の3月、北京市委は、各文芸団体や大学の文科の教職員および学生を約100人、工人体育場に集め、文芸における修正主義思想を批判する学習運動を展開し

た。老舎もその批判の重点とされ、批判材料はすでに印刷されたが、最終的には北京市政府によって保護され、名前は削除された。

1961年の年末、老舎は自伝的な小説『正紅旗下』に主な精力を注いだ。しかし、数ヶ月後に毛沢東が「階級闘争を決して忘れてはならない」<sup>(30)</sup>という呼びかけを発し、イデオロギー分野における階級闘争を強調し、政治の風向きが再び変わった。毛沢東は歴史小説『劉志丹』を批判し、多くの高級幹部や文芸工作者が連座する事態となり、伝記小説のジャンルが深刻な脅威にさらされた。そのため、老舎も『正紅旗下』の執筆を中止せざるを得なくなった<sup>(31)</sup>。

江青(1914～1991、毛沢東の4番目の妻)は1963年のある談話で、老舎が毎朝卵を一個食べることに言及し、老舎を「資本主義作家」のリストに加えた<sup>(32)</sup>。この発言は更に老舎を政治の危険な瀬戸際に追い込んだ。

以上述べたように、老舎は訪日する数年前から既に政治的な苦境に陥り、次第に文壇の中心から遠ざかり、創作活動も年々減少していった。それでは、中国政府はなぜ政治的に危険な状況にある老舎に対して、日本との民間外交任務を遂行することを許可したのであるうか。

それについては、以下の二つの要因を通じて考察することができる。

まずは老舎の名声に関係している。新中国成立以前から、老舎は国内外で著名な作家として知られており、帰国後はかなり

高い待遇を受けていた。老舎は日本でもかなりの名声を持っており、戦後の日本では「老舎ブーム」が起り、「四世同堂」が日本語に翻訳されると強い反響を呼んだ。また、『駱駝祥子』も日本で多くの読者を持ち、七つの日本語訳が登場していた<sup>(33)</sup>。したがって、「朝日新聞」などのメディアも、日本の読者の関心を引くために、報道で「老舎」という名前をタイトルにすることが多かったのである<sup>(34)</sup>。

次に、1950年代から1960年代にかけて、老舎は訪中した日本の作家たちを何度も接待した。徳永直（1889～1958）、火野葦平（1907～1960）、小田嶽夫（1900～1979）、木下順二（1914～2006）をはじめ、井上靖など、多くの作家たちが老舎の温かいもてなしを受け、老舎の訪日の土台を築く重要な要素ともなった。

それにより、日中両国の外交を促進するために、年老いた老舎は再び自分の特別な責任を担うことを決意した。しかし、この時の老舎は、日本での発言が、通訳者によって理由もなく削除されたり、改変されたりしていることに気づいた<sup>(35)</sup>。文芸と政治の狭間に立たされていた老舎は、日本の作家たちとの自由な交流を渴望しつつも、自らの言葉に慎重に配慮せざるを得なかった。そのため、訪日中に最も多く書いたのは友人への贈答の旧体詩であり、かつての熱情で活発、風趣に富んだ作家が、寡黙な詩人へと変わっていった。井上靖が『壺』の中で老舎について、かつてない疲労感が現れ、「この時が一番老いて」<sup>(36)</sup> 見た理由は、まさにこのような背景から来ていたのであろう。

老舎が訪日した翌年、「文化大革命」の嵐が老舎に襲いかか

ったとき、老舎が示したのは依然として中国当局に対する盲目的な信頼と忠誠であった<sup>(37)</sup>。老舎は妻である胡絮青に「毛主席と周総理は私を理解している、人民は私を理解している」<sup>(38)</sup>と語り、自殺する前に、太平湖のほとりに座り、一日中『毛主席詩詞』を読み続けた。老舎が湖底に沈んだ後も、『毛主席詩詞』は水面に浮かんで沈まなかった<sup>(39)</sup>。屈原と同じように、老舎は問題の最終的な解決を最高権力者の理解に託し、屈原のように侮辱を受けた後、深い伝統文化の造詣があるゆえに葛藤し、最終的には自らの命を冷たい湖水に差し出した。

最終的に井上靖は、老舎が語った「壺」の物語が単なる軽い笑い話ではなく、より深い思想や感情が隠されていることに気づいた。『壺』の結末では、「老舎は壺を抱えて飛降りた」<sup>(40)</sup>、「壺を砕いて死んだ」<sup>(41)</sup>という象徴的な描写を通じて、砕かれた壺と老舎の命を重ね合わせ、老舎が自由と尊厳を守り抜こうとする姿が表現されている。それにより、老舎の精神と井上靖の筆致は文学の世界で見事に交わり、両国の文化の融合と理解に永遠に刻まれたのである。

## 六、終わりに

本稿では、井上靖『壺』に記された老舎の「壺」の物語を通じて、老舎の精神的な探求と政治的な苦境を明らかにした。

まずは老舎が語った「壺」の物語と喻血輪の『茶乞』の比較分析を行った。二つの物語の筋書きは基本的に一致しているが、

「壺」の種類と物語の結末が異なることを指摘し、老舎が語った「壺」の物語は、「茶乞」を基にした改作である可能性が非常に高く、老舎の特別な意図も物語の中に隠されていると考察した。

さらに、老舎の『詩人』と『詩人節献词』（詩人祭献辞）二つの文章に見られる理想的な詩人像を考察した。老舎が理想とする詩人像は、権勢と物質の誘惑に屈服せず、崇高な理想と強靱な精神を持っており、真理と正義のために身を捧げる勇気があるというものであり、その精神は老舎自身の生涯に反映されていたと考えられる。

最後に、訪日した時中国の時代背景と老舎の政治的な苦境を分析し、「壺」の物語を語る意図を更に解明した。老舎の「壺」の物語は、その場限りの笑い話ではなく、玉碎瓦全の精神と当時の中国政治の現状を映し出す鏡であった。

【注記】

- 1 中華人民共和国外交部「中日恢復邦交」[https://www.mfa.gov.cn/web/ziliao\\_674904/wjs\\_674919/2159\\_674923/200011/20001107\\_7950654.shtm](https://www.mfa.gov.cn/web/ziliao_674904/wjs_674919/2159_674923/200011/20001107_7950654.shtm) (参照2024-08-02) (本論文で引用した中国語文献の翻訳はすべて拙訳である)
- 2 藤澤全「井上靖の『壺』と老舎の悲劇」『国際関係研究』（日本大学）、第25巻第4号、2005年、157頁。
- 3 同上、162頁。
- 4 同上、161頁。

5 渡辺武秀「老舎の『不伝の世界』考」東北大学中国語学文学論集第10号、2005年、65頁。

6 井上靖「壺」『井上靖全集 第七巻』新潮社、1995年、309頁。

7 同上、313頁。

8 同上、313頁。

9 同上、309～310頁。

10 同上、310頁。

11 同上、310頁。

12 同上、310頁。

13 劉白羽「核海情思」、『劉白羽文集』第6巻、北京：華芸出版社、1995年、341～343頁。

14 巴金著・大林しげる・北林雅枝訳「老舎を偲ぶ」『巴金写作生涯』文芸東北新社、1999年、443頁。

15 同上、443頁。

16 喻血輪著「茶乞」、『綺情樓雜記』全四冊、海豚出版社、2023年、197頁。

17 巴金前掲書、443頁。

18 鮑照「代白頭吟」、『鮑照集校注』中華書局、2012年、163頁。

19 王昌齡「芙蓉樓送辛漸」、『王昌齡詩注』上海古籍出版社、1984年、159頁。

20 顧炎武「潘生次耕南歸寄示」、『亭林詩集』卷五、3頁。

21 李白「擬古其八」、『李太白全集』中華書局、1977年、1099頁。

22 王炎「到胡道士草庵二首・其一」、『宋元詩會』卷四十二、28頁。

23 李中「寄楊先生」、『全唐詩』卷七五〇、8642頁。

24 王本朝「重審老舎与伝統文化的關係」『首都師範大學學報(社会科学版)』、2020年、110～116頁。

- 25 老舍「詩人」、《老舍散文》浙江文芸出版社、2009年、86頁。
- 26 老舍「詩人節獻詞」、《新蜀報》1956年6月30日。
- 27 張桂興によると、舒乙(老舍の息子)は老あ舎が訪日中に「即興で作られた小詩『首』を残したことを回想し、『老舍全集』には21首が収録されており、日記には9首が残っているが、残りは見つからなかった。(張桂興・『老舍旧体詩輯注』、北京：中国国際广播出版社、2000年、5頁。)
- 28 楊慶華「老舍・稻花香里說豐年」《伝記文学》、2017年、30〜36頁。
- 29 傅光明「書信世界里的趙清閣与老舍」《現代中文學刊》、2010年、109〜115頁。
- 30 韓丁『深翻…中国一個村庄的繼續革命紀実』中国国際文化出版社、2008年、287頁。
- 31 関紀新『老舍評伝』重慶出版社、2003年、482〜483頁。
- 32 関紀新前掲書、517頁。
- 33 布施直子「老舍在日本被接納之状況」、《漢語言文学研究》2015年第一期。
- 34 「老舍氏ら来日・中国作家代表团」(『朝日新聞』1965年3月25日)、「訪日」(九州大学地球社会統合科学府修士課程)
- 35 日老舎氏らをかこみ歓迎会」(『朝日新聞』1965年3月28日)、「庶民の町」に興味深げ老舎氏ら中国作家が浅草見物」(『朝日新聞』1965年3月29日)、「老舎氏ら関西旅行」(『朝日新聞』1965年4月1日)。余迅「老舎訪日与20世紀60年代的中日文学交流」《華中師范大学学报(人文社会科学版)》、2020年、127〜133頁。
- 36 関紀新前掲書、517頁。
- 37 井上靖前掲書、309頁。
- 38 李揚「966…老舎生命意義的追問」《文論報》1999年2月11日。
- 39 「老舎与屈原的自沈意義」《文芸理論研究》1999年、64頁。
- 40 傅光明「口述歴史下的老舎之死」《山東画報出版社》、2007年、95頁。
- 41 井上靖前掲書、315頁。
- 42 井上靖前掲書、315頁。